

プラトン『饗宴』における名誉への批判

——小秘儀（208c1–209e4）と冒頭部・叙述構造との関連性から——

劉 思敏

はじめに

『饗宴』で「小秘儀」と称される段落（208c–209e）において、ギリシアで名誉が与えられた人々の名が挙げられている——英雄たちのアルケステス、コドロス、最も偉大な詩人ホメロス、七賢人の中でも最も知のある立法者ソロン、ラケダイモンで「ギリシア全域の救い主」とされる立法者リュクルゴス¹。彼らは徳の模範と認識されており、身体を持つ人間の子供より遥かに羨望に値する「徳としての子供」を産む人々とされる（cf. 209c–e）。彼らには名誉が与えられ、祭壇が建てられたのである（cf. 209e）。

しかしその徳は最終的には「幻影（εἰδωλα）」であると言及されることになる。一方で美そのものを眺めるところで産み出された哲学者の徳のみが「真実（ἀληθής）」と示される（cf. 212a）。また、後者の生のみが「生きるのに値する（βιωτός）」とされる論述から、前者の生は「生きるのに値する」ものではないとするプラトンの判断が窺われる（cf. 211d）。

この種の徳はなぜ幻影でしかないのか。その徳を産み出した人たちは名誉が与えられているにもかかわらず、なぜ彼らは「生きるのに値する」生を送ることができないのか。この問いは存在論の視点から明快に説明できる——小秘儀の参加者は生成界に身を置き、イデアの写しにしか触れていないので、そこで産み出されるものも当然写し・幻影のレベルに属するものである（cf. 212a: τίκτειν οὐκ εἰδωλα ἀρετῆς, ἅτε οὐκ εἰδώλου ἐφαπτομένων, 強調引用者、以下同）。この説明は本論においても否定されえないであろう。しかしこの説明をする前に、次のこと

1 用語「小秘儀」は『饗宴』209e–210aに由来する。そこで「前述した恋に関しての事柄に関して（ταῦτα...τὰ ἐρωτικά）」おそらくソクラテスでも「参加できるであろう」とされるのに対して、前述したことが目的となる最終最奥の秘儀（τὰ...τέλεα καὶ ἐποπτικά）に関して参加できるか否かはディオティマもわからないというエレウシス秘儀を示唆する台詞が確認できる。「前述した」と訳される指示代名詞“ταῦτα”によって、小秘儀とされる段落は209e前の208c–209eを指すと考えられる。

を問うべきであろう——なぜプラトンは彼が身を置く時代の徳と生の模範に満足できず、それらを真実と、生きるのに値するものとして考えなかったのか。というのも、もしプラトンも多くの人と同様に詩人や立法者が提供する徳と生の様式に納得していれば、彼にはイデア論が必要とならないはずであるからだ。

本論ではこの問いへの解答の糸口として『饗宴』の冒頭部（172a-174a）ないしそこで示された作品全体の叙述構造を検討する。そして小秘儀の段落と作品の冒頭部・叙述構造との関連性の分析によって、上記の問いに一つの答えを提供することを目的とする。そのために第1節では「小秘儀」の段落をその議論の文脈から再構築し、小秘儀の参加者がいかに徳を世に残すことによって不死性ないし幸福に与るのかを分析する。第2節では、『饗宴』の冒頭部・叙述構造の分析は作品全体の理解にとって不可欠であることを示す。第3節では、小秘儀と冒頭部との関連性を明瞭にし、『饗宴』の冒頭部ないしその全体の叙述構造はいかに小秘儀で提示されるような生は「生きるのに値する」ものでないことの原因を示しているのかを検討する。

1. 小秘儀における不死性と幸福

1.1 ソクラテス演説における二種の不死性

まず、小秘儀が置かれる文脈、すなわちソクラテス演説の議論全体を一旦確認しておく。ソクラテスはこの演説で、巫女ディオティマの口を通して、幸福主義的な考えを明確に掲げている²——あらゆる人は多種多様な形のエロスを各自有しているように見えるが、これらのエロスはいずれも最終的に「幸福（εὐδαιμονία）」、すなわち、「善が常に自分自身のところにあること（τὸ ἀγαθὸν ἑαυτῷ εἶναι ἀεί）」を目標とする（204e-205d）。この目標は「善を伴う不死性

2 デイオティマの教えは幸福主義でないと主張する研究としては、Kraut（2017）がある。しかしKrautの分析は幸福主義的な理解の論駁として成立しているようには見えない。イデアを求める際には、「人々は自分より聖なるもの、秩序のあるもの、永遠となるもの、従って自分より愛に値するものというような自分以外のものを愛している」とKrautは論じているが（251）、この論はイデアをもつばら「人の外にあるもの」とし、イデアと哲学者の素質との強い関連性を無視しているように思われる。また、『饗宴』での哲学的生は「イデアへの観想」を最終目的とするというKrautの前提も『饗宴』の研究史においては論争となる問題である——イデアの観想は最終目的ではなく、むしろ幸福が最終目的であるとする解釈（White（1989, 149-156））や、観想と哲学者の幸福とは最終的に一致するとする解釈（Sheffield（2006, 113-137））もある。

ἀθανασία μετὰ ἀγαθοῦ」の形に言い換えられる(206e-207a)³。

ディオティマによれば、不死性の実現は同一性の維持に依存しており、そして「同一であること」は二つの仕方でも語られうる。一つは「あること」を通しての端的な同一性である。すなわち、何の変化も生じず、不動性に等しい同一性である。このような同一性に与る神的な存在も「全面に、永遠に同一なものとして在ること」によって、不死であるとされる(208a)。もう一つは「なること」を通してのダイナミックに保たれる同一性である。生成界に身を置くものは、その身体・魂ないしそれが所持する知識において端的な意味での同一性を有しておらず、むしろあらゆる瞬間において「髪においても、肉においても、骨においても、身体全般において物事を失ってゆく」のであり(207d-e)、「性格、信念、欲望、快楽、苦痛、恐れ」といった状態も魂から消えてゆくのである(207e)。さらに、「知識」においても人の同一性は維持され難い——忘却が生じるからである(207e-208a)。それでも人は「同一の人」と呼ばれる。それは「なること」がもたらす同一性である。すなわち、古くなり去ってゆくものの代わりに、それであったもの、それに類似する新しいものが生じてくるが故に、ものが「同じもの」と認識される(cf. 208a-b)。落ちた髪の毛の代わりにそれに類似する髪の毛が生じてくるといった日常的な例はこのプロセスに当たる。

エロスの働きとされる「出産」行為もこのような生成の一種である⁴。身体に基づく出産行為をまず見てみよう。物理的な出産行為を通して、自分に類似する身体を残し、自分の身体が消滅した後もその同一性が存続される。ディオティマによれば、このように保たれる同一性によって、死すべきものは不死性を実現するのである⁵。

3 “ἀεί”の両義性(「いつも」と「永遠に」)を利用し行われたこの再規定は適切ではないと論じる研究としては、Rowe (1998, 248-51)がある。とはいえ幸福の要件として新しく規定される不死性はその後のディオティマの教えでは生の目的として言及されているのは事実である(cf. 206e-207a, 207c-208b, 208c, 208d, 208e, 209e, 209d, 212a)。

4 そのため、207d “τῇ γενέσει”を“τῇ γεννήσει”に改訂しようとする案もある(cf. Bury (1909, 115))。流伝されてきた読みを不必要に改訂することに支持しないが、この改訂案はまさに二つの概念の緊密な関係性を反映できる一例と考えられる。

5 親子関係における類似性はアリストパネスのアンドロギュノス神話(190b: “περιφερῇ δὲ δὴ ἦν καὶ αὐτὰ καὶ ἡ πορεία αὐτῶν διὰ τὸ τοῖς γονεῦσιν ὅμοια εἶναι”)とディオティマのエロス誕生神話(203c: “ἅτε οὖν Πόρου καὶ Πενίας υἱὸς ὢν”)においても示されている。

1.2 小秘儀における不死性と幸福の実現

小秘儀では、身体的な生殖とは異なる形の出産が描かれる。小秘儀の参加者たちは「魂において妊娠する人々」とされる。しかし身体レベルと魂レベルとの相違が存在するものの、この人たちは決して神的存在のように端的な不死性を達成するのではなく、むしろ身体の生殖行為に類似する形に与っている。ただし彼らは身体的に自分に類似するものを産み出すのではなく、むしろ魂に孕んでいる能力を現実化させ、自分の魂に類似するものとして徳の出産を通して、ダイナミックな同一性ないし不死性を達成するのである。

前述のようにそれはアイデアの観想で産み出される「真実の徳」との対照で「幻影」と批判されることになるが、小秘儀を説明する段階では明示的な批判がなされておらず、むしろその徳がもたらす不死性・幸福の実現が論じられている⁶。以下は「複製」「記憶」「名誉」という三点から、不死性・幸福の実現の実現を整理する。

- (1) 複製：参加者は自分の複製を残し、そしてそれはまた共同世界の中で複製されていく。消えたものに類似する新しいものが生じることによって、参加者の同一性は保たれる。
- (2) 記憶：人々の記憶を媒介にし、参加者は自分の身体性に基づく生を超える不死性を実現する。
- (3) 名誉：参加者は共同世界で「よい者」と思われ、彼らに関しての記憶は「永久に不死たる名声」として言い換えられうる。そのためその不死性は「善を伴う不死性」すなわち「幸福」である。

ディオティマがあげた具体例を見よう。英雄たちは彼らの行為を通して自分の徳を具体化させた上で、それは共同世界での人々の記憶の中で保存され、さらに繰り返し言及される（cf. 208b）。それによって不死性の実現される。それだけでなく、彼らは「よい者」と評価され、その記憶は「評判の良い名声」でもある（cf. 208c, d）。少年愛関係では、恋する者は^{エラスデス}「徳を含む言論を産み出し、彼が恋する少年はそれを記憶するとされる（209a-c）。ホメロスをはじめとする優れた詩人たちは徳を表し得る詩を作り出し、それが繰り返され吟誦されることで、彼ら

6 とはいえ小秘儀への批判は、それを導入する時のディオティマに関しての描写「完璧なソフィストたちのように」によって示唆されている（cf. 208c）。

に關しての記憶も保存され、名誉が与えられる(209c-d)⁷。他に、リュクルゴスとソロンは法律を作り出すことで、その法と制度は保存され、彼らにも多くの名誉が与えられる(209d)。

従って、小秘儀は不死性・幸福を実現する方途として述べられている。すなわち、自分に類似するものとしての徳が共同世界で複製され、人々の記憶で保存されることで、その徳を出産する者の不死性を得る。そして、共同世界で善いと思われるがゆえに、彼はさらに「徳のある者」という名声を獲得し、こうして「善を伴う不死性」としての幸福を獲得するのである。

2. 『饗宴』における冒頭部・叙述構造の役割

ここで、冒頭の問いに向かうことになる——なぜ名誉を持つ人々の徳は「幻影」でしかなく、その生は「生きるのに値するもの」にはならないのか。本稿では、『饗宴』の冒頭部ないしそこで規定される作品全体の叙述構造を分析することを通して解答を試みる。

具体的な分析に入る前に、まずプラトン対話篇における冒頭部の役割に關しての但し書きを付け加えておく。哲学的な問答、とりわけ通常「ソクラテス」と名付けられる登場人物の発言はプラトン哲学研究の中心に置かれている。それに対して、ソクラテスの台詞以外の部分は作品の周縁と見做されることが多い。その中でも本格的な哲学問答が展開される前の作品の冒頭部はとりわけ軽視されやすい。しかし『パイドロス』で記されるように、作品の諸部分は、互いに対しても、さらにその全体に対しても、有機的に互いに絡み合うべきものである(cf. *Phdr.* 264c)。周縁の哲学的意義は中心となる哲学的議論を理解した上で把握されうると同時に、この把握はさらに中心への理解を深めると考えるべきであろう⁸。

『饗宴』の冒頭部はとりわけ作品全体と緊密に絡み合っている。それは、そこ

7 『饗宴』ではホメロスが多く引用されていることもこの点を裏付けている(cf. 174b-c, 179b, 179e-b, 183e, 190b-c, 195b-c, 195c-d, 198c, 214b, 219a, 220c)。

8 対話篇冒頭部を対話篇の中心部との関連で理解すべき考えは、現存の資料でプロクロスの『パルメニデス』註解 658.33-659.23 にまで遡ることができる。プロクロスによれば、プラトン対話篇に対して、「対話篇の主題となる事柄へとりわけ目線を向けること、冒頭部(τὰ προοίμια)は如何にそれらを表すのかを考察すること、そしてあらゆる部分から調和される一つの生き物を示すこと」を見るべきであるという(659.13-17)。そして冒頭部を重要視し、それを対話篇全体から理解すべきとする現代の研究としては、Burnyeat (1997) が最も影響力がある。

で作品の背景設定ないし議論される主題が規定されているだけでなく、この作品は如何に語られるのか、すなわち作品の叙述構造も定められているからである。以下は便宜上、図1を踏まえながら説明を行う。

冒頭部では、アポドロスは匿名の人々に「あなた方が尋ねることについて私は練習していない状態ではないと私には思われる」と語り、次のエピソードを紹介する——彼は、前416年に悲劇詩人アガトンの邸宅で行われた祝勝宴で披露された恋に關しての七篇の演説を、二日前にグラウコンという人物に対して報告した（[N5]）。実際、このグラウコンはアポドロスの報告を聞く前に、フォイニクスという人物から話を聞いた別の誰かから話を聞いたのである（[N3], [N4]）。しかしそれは全く明瞭になされなかったから、彼はアポドロスを尋ねに来たのである。しかしアポドロスもこれらの演説を直接は聞いていない。彼はフォイニクスと同じように（[N2']），アリストデモスというソクラテス信者から聞いたのである（[N2]）。二日前の報告と同じ仕方で報告を再びすることができるということとして、匿名の聴衆たちに対して、彼は「練習していない状態ではない」のである。そして、『饗宴』の本編はまさにアポドロスは匿名の仲間たちに対してアリストデモスから聞いた宴会の話の報告するところを現場とする（[N6]）。

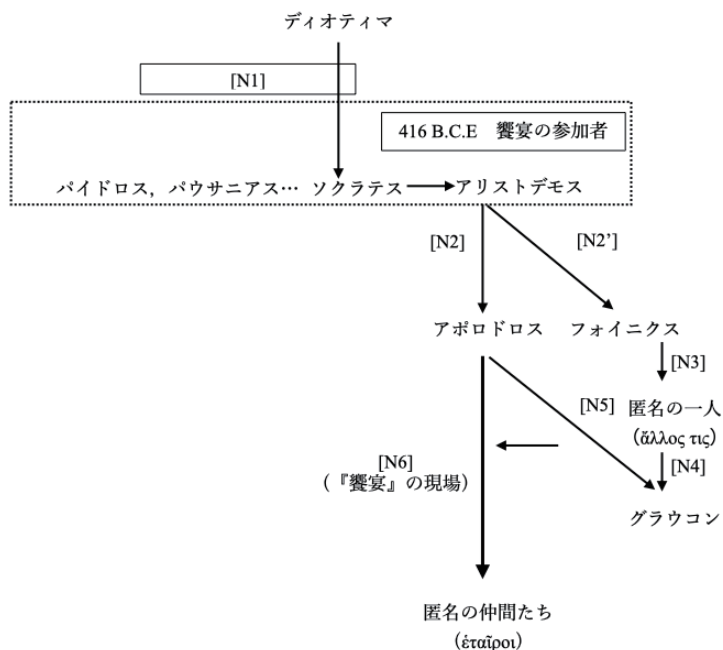


図1 『饗宴』の叙述構造

「アリストデモスによる報告の再報告」であるがゆえに、『饗宴』の「本編」は引用文から構成されている。「と彼 (sc. アリストデモス) は言った (ἐφη)」は『饗宴』で 26 回使用された⁹。また、「彼 (sc. 各登場人物) は『…』と言った、と彼 (sc. アリストデモス) は言った (εἰπεῖν/φάναι [ἐφη])」は 97 回見られる¹⁰。そして、アリストデモスに報告される演説の中で、各演説者による報告や引用も確認できる。例えば、ソクラテス演説はほぼ巫女ディオティマの教えの報告である。その場合、叙述は「『…』とディオティマは言った』とソクラテスは言った』とアリストデモスは言った」という極めて複雑な構造を持つことになる ([N1])。

冒頭部・叙述構造を中心に行われる研究としてとりわけ優れた成果を取めた Halperin によれば、「この作品はおそらく…諸対話篇の中で、最も複雑な構成方法を有している」(96)¹¹。Halperin は彼自身の分析において、叙述構造が持つ互いに相反する二つの側面を示している。一方は、叙述構造はディオティマの教えを積極的に現すものである。すなわち、アポロドロスによる報告を通して、祝宴に参加する人々の演説と徳は残される。これはディオティマが教える不死性を人々に与えるエロスの働きそのものの呈示である。Halperin はこの側面を叙述構造の「表の理解」(official reading) と名付ける。他方では、叙述構造に関して「裏の理解」(unofficial reading) もありうる。それは、ディオティマの教えを否定するものである。なぜならばアポロドロスはよい報告者であるとは言えないからである——彼は対象を選ばず、誰に対しても同じことを語っているのである。

9 174a3, 174c5, 174d4, 174e9, 175a3, a6, b4, c2, c7, 176a1, a4, 176b5, d5, 178a6, 180c1, 185c5, 189a1, 193e3, 194d1, 198a1, 199b6, c2, 200d6, 223b7, 223d1, d3. (行番号は Burnet (ed.) に従う。以下同。)

10 174a6, 174c5, 174e5, 175a3, a7, b1, b4, c7, d3, d4, 176a4-5, 176a5, b2, b6, b8, d5, e4, 177a1, d7, 178a6-7, 180c1, c3, 185c7, d4, e4, e6, 189a1, a7, b3, b8, c2, 193e3, 194a1, a5, a8, b6, c1, c8, d1, e1, 198a3, a8, b1, 199b7, c1, 199d8, e1, e4, e6, 200a1, a4, a7, a8, b3, b9, d8, e1, e6, e7, 201a1, a7, a8, b3, b5, b11, c1, c6, c7, 212c8, e5, 213b4, b6, c6, d7, e1, e7, e12, 214a3, a7, b3, b5, b9, c6, d5, d6, d9, e1, e4, e7, e9, 222c3, d7, e4, e6, e10, 223a3, a6. 本稿では、εἰπεῖν/φάναι ἐφη の形で直接に言及される箇所その他、主動詞 ἐφη が省略されているながらも、不定詞 εἰπεῖν/φάναι のみの使用によってその文法上の存在が示唆されている箇所も数える。

11 他に近年の研究としては、Giannapoulou (2017, 9-27) がある。この研究での部分的分析は本稿の考察にとっても有益であるが、全体としての論点には納得できない。というのは、彼女は「時間性 (temporality)」の視点から、本論が「冒頭部」とする 173a-174a と、ソクラテスがアガトン邸宅に至るまでのアリストデモスの報告 174a3-175c6 を対照させる。前者は「後退的 (regressive)」であり、ディオティマ演説での「エロスがよいものを得るモデル」(204d-206a) に対応しているのに対して、後者は「前進的 (progressive)」であり、演説での「エロスがよいものを産み出すモデル」(206b-208b) に対応しているとするが、ディオティマ演説では明瞭にこの種の区分がなされていない。むしろ「よいもの (幸福・不死性) を得るには、よいものを産み出す」構図がディオティマ演説の全体において見られるのである。

Halperin の分析は精緻であり、とりわけ叙述構造と『饗宴』の中心部との関連性に対しての指摘は鋭い。しかし叙述構造に関する互いに相反する二つの側面をいかに調和的に理解できるのかに関しては、分析が不十分である。Halperin 自身はこの矛盾に関して、『饗宴』でプラトンはエロスに関する理論を残してはいるが、それを「一群の教説」(a body of dogma) として捉えられないようにこのような叙述構造を布置していると論じている(119)。しかしその前に、Halperin は『饗宴』の叙述構造を「ディオティマの哲学的教えを肯定的に呈示しつつも、その教えをまた否定する」ものと見做す判断はやや性急であると思われる。なぜならば祝宴の参加者はアポロドロスによる報告を通して不死性と幸福を実現するとする叙述構造の「表の理解」は、本稿の分析対象となる「小秘儀」ないしそこでの不死性の実現をディオティマの教えで真剣に受け止めるべき部分と見做すことを前提にしているが、前述のように、小秘儀に与る人々の生は「生きるのに値する生」として数えられておらず、その徳も「幻影」として言及される。そのため、叙述構造には「表の理解」はそもそも成立し得ない。

冒頭部・叙述構造をディオティマ演説全体の教えとの関係で考える Halperin に対して、本稿は『饗宴』の冒頭部・叙述構造と小秘儀との関係のみに分析の力点を置く。すなわち、叙述構造はディオティマ演説の「小秘儀」を反映できる典型として考える。しかしディオティマ演説では小秘儀ないしそこでの不死性と幸福との実現は最終的に否定されてしまうのである。そのため、叙述構造はディオティマの教えを肯定すると同時に否定するものであるというよりも、最終的に否定される小秘儀の表面化として、それが否定される理由を示すことによって、ディオティマの教えを全般的に肯定するものと捉えるべきであろう。以下 3.1 では叙述構造は小秘儀の表面化であることを示す。3.2 では、叙述構造は小秘儀で示された名誉を求める生の破綻を示していることを論じる。

3. 名誉を求める生の破綻

3.1 「子」としてのアポロドロスの叙述

前述のように小秘儀の参加者たちは自分に類似するものとしての徳を言論の形で残し、それが世間の中で複製される。このような複製の中で、彼らは人々の記憶の中で不死性を実現する。さらに、彼らは「よい者」として人々の記憶で保存されるがゆえに、彼らは「善を伴う不死性」としての幸福を実現できる。本節

でも第1節で分析した時に用いた(1)複製,(2)記憶,(3)名誉という三要素から,冒頭部・叙述構造は小秘儀の表面化であることを示す。

(1) アポドロスの叙述は複製である。このことは[N2], [N5], [N6]の三者関係から解る。まず「[・]ち[・]ょう[・]ど[・]彼(=アリストデモス)が報告していた[・]よう[・]に(ὥς ἐκεῖνος (sc. ὁ Ἀριστοδόδημος) διηγείτο)」報告していくというアポドロスが[N6]の報告を始める前の台詞から,[N6]は[N2]の複製であることがわかる。また前述のように,[N6]は「と彼(sc. アリストデモス)は言った」という表現が頻繁に見られる。そして,[N6]は[N5]の複製でもある。[N5]が導入される理由は一見すると不可解である——アポドロスが匿名の仲間に饗宴の話を報告するために、なぜ自分が二日前にも同じことを話したというエピソードを紹介したのか。この理由は小秘儀との関連性から考えれば明らかとなる。というのは、アポドロスはこのエピソードを導入する前に、「あなた方が尋ねていることについて、私は連取していない状態ではない」と述べ(172a)、紹介した後にまた「その結果、これが私が最初に言ったことだが、私は練習していない状態ではないのだ」とエピソードを終える(173c)。円環構造(ring composition)の形を採るこのエピソードの導入は、まさに[N6]は[N5]と同じ内容であり,[N5]の複製であることを示している¹²。さらに[N5]も[N2]の複製である。なぜならば[N6]も[N2]に基づいているものであるからである(cf. 173a–b)。また,[N2]の複製となる[N6]が[N5]と同じ内容である点からも,[N5]も[N2]の複製であることが明らかである。そのため,[N2],[N5],[N6]にある複製関係は、まさに同一性を実現させる小秘儀の表面化として捉えるべきである。詩人の詩が常に繰り返され、人々の間で複製されていくように、饗宴で行われた七人の演説もアリストデモスやアポドロスによって繰り返され、複製されていくのである。

(2) アポドロスの報告は記憶に依存している。彼は彼が「記憶するのに値する(ἀξιομνημόνευτος)」と考えるものを報告するとされる(177e–178a, 180c)。この語はまさに小秘儀の段落の鍵となる概念である「記憶(μνήμη)」という構成要素を含む。饗宴の参加者たちの徳は、小秘儀の参加者の徳が人々の記憶に残るのと同じように、アリストデモスの記憶の中で保存されている。また、この記憶での保存は練習(μελήτης)の結果であるが、後者はディオティマに記憶を維持するために不可欠なものとされる(208b)。「私は練習していない状態ではない」という台詞は172aと173cとの二箇所において確認できる。文字通りに「練習し

12 この分析は Giannapoulou (2017, 13–4) を参照している。

ていない状態(ἀμελέτητος)と訳される語は「欠性辞の ἀ(privative ἀ)」と名詞「練習(μελήτης)」からなる形容詞である。そのため、[N6]はまさに練習を積み重ねてできあがった記憶の成果である¹³。

(3) 叙述者のアポドロスは饗宴の参加者たちをよい者と認め、彼らに名誉を与える人物である。小秘儀の参加者は単に不死性を実現しているのではなく、むしろ同時に「善を伴う不死性」としての幸福を実現していると考えられるべきである。彼らに関しての「記憶」は「栄誉」である。同様に、叙述者のアポドロスないしアリストデモスは饗宴の参加者たちをよい者と認める人である。彼らはまず「熱狂的なソクラテス信者」として描かれている(cf. 172c, 173b, 173d)。一方で他の参加者に関しても、彼らを「知のある人」と考え、彼らの演説を「最も重要なもの」として報告しているのである(cf. 174c-d, 178a)。

この三点から、『饗宴』の冒頭部・叙述構造は小秘儀の表面化であることがわかる。詩篇が人々に繰り返され伝誦されることを通して、ホメロスは不死性と幸福を達成していくように、饗宴の参加者たちの演説もアリストデモス・アポドロスによって繰り返され、保存されていく。それを通して、彼らは小秘儀的な方途を通して不死性と幸福を実現しているのである。

3.2 名誉がもたらす不死性・幸福の脆弱さ

最後に再び(1)複製、(2)記憶、(3)名誉という三つの要件を踏まえながら、この種の不死性と幸福が真なるものとされない理由を検討する。

(1)複製としての叙述は常に不安定である。前節の分析によれば、アポドロスやアリストデモスによる繰り返しのによって饗宴の参加者たちの同一性が維持される。しかし冒頭部では、この複製には変形が生じることが不可避的であることも示されている。アポドロスによれば、グラウコンは彼を尋ねる前に、まず他の誰かからその話を聞いたのである([N4])。そしてその人も、同じくアリストデモスから報告を聞いたフォイニクスという人物から話を聞いたとされる([N2'], [N3])。しかし[N4]は「全く不明瞭」とされる(cf. 172b)。そこで、七篇の演説の内容どころか、その背景となる祝宴会は十数年前に行われたことではなく、むしろ「最近の出来事」として報告されてしまったのである(cf. 172c)。この点から、冒頭部・叙述構造は小秘儀で不死性実現の鍵となる複製は常に不安定であることを示す役割を担っているという結論に至る。

13 アポドロスの「練習」については Halperin (1990, 104-5) を参照。

(2) 記憶による保存は常に忘却のリスクを伴い、不安定である。前節では、アポドロスは諸演説を記憶の中で保存していると論じた。しかし実際の状況はより複雑である。七篇の演説が逐次に報告される直前のアポドロスの説明と、最初の演説となるパイドロス演説の報告を終え、パウサニ阿斯演説を報告する前に行われるアポドロスの説明を見よう。

そして一方、それぞれの人が語ったことについて、アリストデモスはその全部をあまり覚えていたわけではないし、私もまた彼が言ったことを全部覚えていたわけではない。他方では、最も価値のあるもの、すなわち、覚えるのに値すると私には思われたものについて、その一人一人の演説をあなた方に言う。
(178a)

パイドロスは大体以上の演説を行った、と彼は言った。パイドロスの後に、他の何人かの演説もあったのだが、それらについて彼はあまり覚えていなかった。彼はそれらを飛ばして、パウサニアスの演説を報告していた。(180c)

180c が示しているように、七篇の演説と同じように披露されたが、「アリストデモスはあまり覚えていない」ものも実際に存在していたのである。また、178a1-5 によれば、アリストデモスの記憶に保存されているとしても、その全部が保存されるというわけではなく、無意識なものであれ、取捨選択の結果であれ、忘却は常に随伴するのである。物理的な子供の場合、子は親に類似しており、孫もまたその類似性を一部保存しているかもしれないが、孫の子ないしその後の後裔が持つ先祖との類似性が薄まっていく。饗宴の参加者たちの演説もアリストデモスによって一部忘却されており、またアポドロスによって一部忘却されていくのである。記憶と常に同時に生じる忘却は小秘儀的な不死性の実現にとって致命的と言える。

(3) 名誉は常に共同世界の^{ドクサ}思惑に依存しているが、それが不安定である。小秘儀の段落においても、名誉ないし幸福は参加者自身ではなく、むしろその外部に依存することが示唆されている。

リュクルゴスはラケダイモンにおいて (ἐν Λακεδαίμονι), 「ラケダイモンないしいわゆる全ギリシアの救い主」という子を後に残しているようなこともそうであ

る。それに、あなた方のところにおいても（παρ' ὑμῖν），ソロンは諸法を産むことによって名誉が与えられ、そして他の多くのところにおいても——それはギリシアにせよ、ギリシア以外の異国にせよ——（ἄλλοθι πολλοῦ...καὶ ἐν Ἑλλήσι καὶ ἐν βαρβάροις）彼ら以外の人々も多くの美しい働きを見せることで、すなわちありとあらゆる徳を産むことで〔名誉が与えられた〕。このような子供たちのおかげで、彼らのための神殿が多く作られてきた、人間的子供たちのことでこのようなものはどこにも一つもないのだ。（209d-e）

ここで繰り返して使用される前置詞から見て、小秘儀の参加者はそれに関連する一部の人々によって「よい者」と思われ、その徳が徳として肯定され、名誉を与えられるのである。一方で、常に他の一部の人々によって「よくない存在」と思われ、悪名を与えられる可能性も示唆されている。Dover（1980, 154）の指摘によれば、実際にペロポネソス戦争とコリントス戦争後の時代に属すプラトンの読者はリュクルゴスに「救い主」という称号を与えなかったという。

冒頭部・叙述構造では、このことはさらに強調される。アポドロスは饗宴の参加者たちのことをよいと評価し、彼らに名誉を与えている。この点で、参加者は不死性のみならず、幸福も実現している。しかしこの場合でも、その不死性と幸福は彼ら自身に依拠するものではなく、むしろその外部に存在する人々に依拠するのである。上に引用した 178a では、七篇の演説は「最も価値のあるもの」ではあるが、この形容詞はすぐ「覚えるのに値すると私には思われたもの（ἃ δὲ μάλιστα καὶ ὧν ἔδοξέ μοι ἀξιομνημόνευτον）」と言い換えられる。この意味では、[N6] はアポドロスが価値があると思うような事柄の記録である。反対に、それらの演説を「覚えるのに値する」と見做さない人々の場合、それは忘却を得る（[N2'] [N3][N4]）。また、悪名を得る可能性さえある。実際にはグラウコンや匿名の仲間たちは、饗宴の参加者たちを「よい者」と評価できるような人物ではないと思われる——前者は哲学に全く興味のない人物として言及されており、後者は金儲けや商売にしか興味がないと言及されているからである（cf. 173a, c-d）¹⁴。そのため、彼らが饗宴の話を尋ねる動機はソクラテスの哲学への興味というより、むしろ好奇心を満たすためのほうにあると推測できる¹⁵。これらの布置によって、饗

14 このグラウコンは『国家』の登場人物と同じであるか否かに関しては不明である。しかしいずれにせよ、『饗宴』でのグラウコンは哲学に対して興味のない人として描かれている。

15 このことを理解するために、叙述現場となる [N6] はいつの出来事として設定されているのかが

宴の参加者たちの名誉ないし幸福は不安定であるように見えてくる。それは、「どのように思われるのか」、すなわち人々の思惑に依存している。たとえ徳として認められるとしても、生成界に流伝される場合において、さらに忘却されてしまう可能性がある。

ここで、我々は最初の問いに解答しうる——小秘儀における徳はなぜ「幻影」とされるのか。それは、この徳はそれ自体として「善である」のではなく、むしろ常に共同世界にいる人々の「思惑」に依存し、「善と思われる」ものであるからである。また、小秘儀における生はなぜ「生きるのに値する」のではないのか。それは、その不死性と幸福は共同世界での複製と記憶に依存しているが、生成界に属している限り、それは常に複製の変形や忘却といった危険性を伴うからである。ここで、アイデアが必要となる理由も部分的に解明できる。アイデアは思惑ではなく、真なる存在である。生成界に属すあらゆる「善と思われる行為」はいずれも何らかの仕方で「善であること」としてのアイデアを分有しているのであり、後者は変化を伴わず、安定した、真なる存在なのである。

しかし無視できないのは、プラトンの言論として生成界に残される『饗宴』も明らかに作中の小秘儀に与る作品であるということである¹⁶。本稿を通して、『パイドロス』(276d) および「第七書簡」(341b-d) でも見られる内容(「書かれたもの」と形式(「書くこと」)との緊張は、『饗宴』を通して捉えられることになる。言葉を世間に残していく行為をはじめとする小秘儀の脆弱性を十分に認識し、これらの行為に疑念を抱きながら、あえて観想的な生の他に、このような行為を行うプラトンの意図を如何に理解すればいいのか。これはプラトンが書いた作品の深部に常に眠っている問いであろう。

参考文献

Burnet, J. 1901. *Platonis Opera* vol.2, Clarendon Press.

Burnyeat, M. F. 1997 “First Words: A Valedictory Lecture,” *Proceedings of the Cambridge Philological Society*, 43, 1–20.

Bury, R. G. 1909. *The Symposium of Plato*, Cambridge University Press.

重要な問題となる。Nails (2006, 205–6) は、『饗宴』は『テアイテトス』と同様に、ソクラテス裁判が起る 399 年であり、とりわけソクラテスの告発状が公開される時点から初審 (ἀνάκρισις) の日付が決定される時点までの数ヶ月間を背景にしていると指摘している。

16 『饗宴』全体は冒頭の一文字 “δοκῶ” もこのことを示唆している。『饗宴』は「思われる」という言葉から始まった作品である。

- Cousin, V., 1864. *Procli philosophi Platonici opera inedita*, Durand.
- Dover, K., 1980. *Plato Symposium*, Cambridge University Press.
- Giannopoulou, Z. & Destrée, P. (eds.) 2017, *Plato's Symposium: A Critical Guide*, Cambridge University Press.
- Giannopoulou, Z., 2017. "Narrative Temporalities and Models of Desire," in Giannopoulou, Z. & Destrée, P. (eds.), 9–27.
- Halperin, D. M., 1990. "Plato and the Erotics of Narrativity," in *Oxford Studies in Ancient Philosophy*, Supplementary Volume, J. Annas, J. C. Klagge, N. D. Smith (eds.), Oxford University Press, 93–130.
- Kraut, R., 2017. "Eudaimonism and Platonic erōs," in Giannopoulou, Z. & Destrée, P. (eds.), 235–52.
- Nails, D., 2006. "Tragedy Off-Stage," in *Plato's Symposium: Issues in Interpretation and Reception*, D. Nails, F. Sheffield, J. Leshner (eds.), Harvard University Press, 179–207.
- Rowe, C., "Socrates and Diotima: Eros, Immortality, and Creativity", *Proceedings of Boston Area Colloquium in Ancient Philosophy*, 14, 239–59.
- Sheffield, F. C. C., 2006. *Plato's Symposium: The Ethics of Desire*, Oxford University Press.
- White, F. C. 1989, "Love and Beauty in Plato's *Symposium*," *The Journal of Hellenic Studies*, 109, 149–57.